日刊産業新聞　2008年6月5日（木）

日本精鉱

連続操業を今期確立へ

最終工程整備し効率向上

岩山社長

三酸化アンチモンの国内最大手である日本精鉱は、中瀬製錬所（兵庫県）で進めている連続操業体制を前倒しで確立する。すでに転炉工程では連続操業体制を整えているが、現在ボトルネックになっている最終工程の荷造り設備を本年度中に整備し、生産効率を大幅に高める。当初計画では2009年度中の確立が目標だった。

07－09年度の中期経営計画ではアンチモン製造プロセスの連続操業体制の確立と製造コストの削減を掲げている。連続操業化による全体的な製造フローを改善することで、生産性を高めるほか、省エネルギー操業の推進などを図り、製造コストを削減。品質に加えて価格面での競争力も強化する。

プラスチックの難燃助剤に使う三酸化アンチモンは、アンチモン地金が原料になる。ただ、世界の生産量の80％強を占める中国は、自国資源の保護政策を掲げ、希土類やタングステンなどと同様にアンチモン地金の輸出数量規制を強化するとともに、輸出税の増税懸念もある。

中国は対照的に製品である三酸化アンチモンの輸出を促進しており、日本市場だけでなく、東南アジア市場でも低コストの中国製品との競争が激しくなっている。

日本精鉱はこのため、中国企業に生産委託している汎用グレード品を主に東南アジア市場向けに販売、同市場での競争力を維持している。ただ、日本市場にも低価格の中国製品が流入しているため、中瀬製錬所でも連続操業体制を前倒しで整え、製造コストの削減をめざす。

自動車などのエンジニアリングプラスチックに使うアンチモン酸ソーダも拡販する。このほど設備の増強が完了し、生産能力は倍増した。販売量も増加傾向にある。半導体関連で需要拡大が期待できる純度99・999％の高純度金属アンチモンも増産のための建屋を建設し、製造設備を整える計画。